

令和6年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和6年7月30日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表は令和6年8月27日の予定です。

※7月24日からの大雨による被害を受けた場合は、7月26日発表の防除対策情報第9号を参照して防除してください。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇病虫害発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトで読者登録できます。<https://www.e-komachi.jp/>

◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は、秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	穂いもちの発生量が多いと予想されます。7月30日発表の防除対策情報第10号を参照して防除してください。 斑点米カメムシ類の発生量が多いと予想されます。7月17日発表の注意報第1号を参照して防除してください。
大 豆	紫斑病の発生量が多いと予想されます。開花期20～30日後に薬剤を莢によく付着するように散布してください。 マメシンクイガの発生量が多い、吸実性カメムシ類の発生量はやや多いと予想されますので、適期に防除してください。
野菜・花き	病害では、きゅうりの炭疽病の発生量が多いと予想されます。発病した葉や茎、果実を除去した上で薬剤防除に努めてください。 害虫では、ねぎ（夏どり）及びトマトのアザミウマ類、きゅうりのワタヘリクロノメイガ、えだまめの食葉性鱗翅目幼虫、野菜・花き共通のオオタバコガ、ハスモンヨトウの発生量が多いと予想されます。発生状況を確認して防除してください。
果 樹	りんごでは、斑点落葉病、褐斑病の発生量が多いと予想されます。7月30日発表の防除対策情報第11号を参照して防除してください。 なしでは、輪紋病の発生量が多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合や発病が認められる園地では散布間隔を短くして防除してください。 ぶどうでは、べと病、晚腐病が多いと予想されます。発病部を速やかに除去し、適切に処分してください。また、チャノキイロアザミウマが多いと予想されます。発生時はジアミド系剤やスピノシン系剤などを散布してください。 薬剤によって収穫前日数が異なるため、薬剤の選定にあたっては早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病（穂いもち）	全県	早い	－	多い
	紋枯病	全県	－	やや多い	多い
	コブノメイガ （第 2 世代）	全県	早い	平年並	平年並
	セジロウンカ （第 2 世代）	全県	やや早い	多い	多い
	斑点米カメムシ類（第 2 世代成虫） （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ）	全県	早い 早い 早い	多い 多い やや多い	多い 多い やや多い
大 豆	紫斑病（子実）	全県	やや早い	－	多い
	ウコンノメイガ	全県	－	少ない	少ない
	アブラムシ類 （ジャガイモヒゲナガアブラムシ） （ダイズアブラムシ）	全県	やや早い やや早い やや早い	やや少ない やや少ない 平年並	やや少ない 少ない やや多い
	吸実性カメムシ類 （ホソヘリカメムシ）	全県	早い	平年並	やや多い
	フタスジヒメハムシ	全県	－	－	多い
	マメシンクイガ	全県	平年並	－	多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	－	平年並	やや多い
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
ねぎ （夏どり）	黒斑病・葉枯病	全県	－	やや少ない	平年並
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	－	多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	－	やや少ない	平年並
ねぎ （秋冬どり）	黒斑病・葉枯病	全県	－	平年並	やや多い
	アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	全県	－	平年並	やや多い
	ネギハモグリバエ	全県	－	やや少ない	平年並
きゅうり	べと病	全県	－	平年並	やや多い
	うどんこ病	全県	－	やや少ない	やや少ない
	褐斑病	全県	－	やや少ない	平年並
	斑点細菌病	全県	－	平年並	やや多い
	炭疽病	全県	－	やや多い	多い
	アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	全県	－	少ない	やや少ない
	ワタヘリクロノメイガ	その他	－	多い	多い
トマト	葉かび病	全県	－	平年並	やや多い
	すすかび病	全県	－	平年並	やや多い
	灰色かび病	全県	－	やや少ない	平年並
	うどんこ病	全県	－	平年並	平年並
	アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	全県	－	やや多い	多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	－	平年並	やや多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	多い	多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	多い	多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	多い	多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	平年並
	炭疽病	全県	—	平年並	やや多い
	輪紋病	全県	—	—	やや多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや多い	多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	全県	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	やや多い
	キンモンホソガ	全県	—	やや多い	多い
な し	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	全県	—	—	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、 リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
ぶどう	べと病	県南部	—	やや少ない	多い
	灰色かび病	県南部	—	やや少ない	平年並
	晚腐病	県南部	—	—	多い
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	—	やや多い	多い

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 いもち病（穂いもち）	早い（－）	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。

イ ７月19日発表の作況ニュース第６号によると、稲の生育はやや早いと予想されている（－/ ）。

ウ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における葉いもちの発病株率は0.8％（平年2.5％）、同地点率は7.5％（平年13.4％）といずれもやや低かった。穂いもちの主な伝染源となる上位２葉の葉いもち発病株率は0.3％（平年0.2％）とやや高く、同地点率は5.0％（平年2.3％）で高かった（ /+）。

エ ＢＬＡＳＴＡＭ法（アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム）において、７月20日、27日、28日、29日に全県的に感染好適・準感染好適な条件になっている（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ７月30日発表の防除対策情報第10号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 紋枯病	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における発病株率は1.9％（平年1.8％）、同地点率は13.8％（平年15.5％）でいずれも平年並、要防除地点率は6.3％（平年2.9％）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15％を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 コブノメイガ（第２世代）	早い（－）	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。

イ 有効積算温度計算シミュレーション（ＪＰＰ－ＮＥＴ、気象観測地点：秋田）による第１世代成虫の羽化始期は、８月２日（平年推定日羽化始期８月６日）でやや早いと推定される（－/ ）。

ウ 秋田市雄和の予察ほにおけるフェロモントラップへの初誘殺は６月30日で前年より早かった（－/ ）。

エ ７月５半旬の巡回調査（80地点）における食害株率は0.06％（平年0.07％）、同地点率は1.25％（平年0.98％）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多肥により葉色が濃いと被害が出やすいため、適正な施肥量とする。
- イ 早期発見に努め、幼虫のふ化初期にパダン粉剤DL、パダンSG水溶剤のいずれかで幼虫のふ化期に防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 セジロウンカ (第2世代)	やや早い (前年並)	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 初飛来は6月24日 (平年6月29日) でやや早かった (- /)。
- ウ 7月5半旬の巡回調査 (80地点) における本田のすくい取り調査の成幼虫数は4.8頭 (平年1.4頭) で多かった (/+)。
- エ 7月5半旬の巡回調査 (30地点) の払い落とし調査 (粘着板法四株叩き式) における10株当たり幼虫数は25.0頭 (平年6.8頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 有効積算温度計算シミュレーション (JPP-NE T、気象観測地点: 秋田) による初飛来時期を起点とした第2世代幼虫の発生時期は、8月16日頃と推定される。
- イ 本虫の第2世代における要防除密度の暫定値は、中老齢幼虫が株当たり25頭以上 (粘着板法四株叩き式では全幼虫数が株当たり50頭以上) である。
- ウ 出穂期10日後頃にアルバリン/スタークル剤により斑点米カメムシ類の防除を実施した場合は、本虫を対象とした薬剤防除の必要はない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 斑点米カメムシ類 (第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	早い (前年並) 早い (前年並) 早い (前年並)	多い (前年より多い) 多い (前年より多い) やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている (- /±)。
- イ 7月5半旬の巡回調査 (80地点) における畦畔でのアカスジカスミカメ (以下、アカスジ) のすくい取り数は1.0頭 (平年3.1頭) でやや少ない、発生地点率は23.8% (平年18.7%) で高かった (/+)。アカヒゲホソミドリカスミカメ (以下、アカヒゲ) のすくい取り数は2.0頭 (平年2.4頭) で平年並、発生地点率は40.0% (平年30.3%) で高かった (/+)。
- 同調査における水田内でのアカスジのすくい取り数は1.3頭 (平年0.4頭) で多く、発生地点率は12.5% (平年9.2%) で高かった (/+)。アカヒゲのすくい取り数は0.5頭 (平年0.2頭) で多く、発生地点率は17.5% (平年10.9%) で高かった (/+)。
- ウ 予察灯 (6地点) における7月1～4半旬の総誘殺数はアカスジが144頭 (平年148.2頭) で平年並 (/±)、アカヒゲが625頭 (平年777.6頭) でやや少なかった (- /)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 7月17日発表の注意報第1号を参照する。
- イ アルバリン/スタークル剤は、セジロウンカ及びヒメトビウンカにも有効である。
- ウ 水田内に出穂したノビエやホタルイ類などが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源と

なるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期10日後頃の薬剤防除に加えて同24日後頃にもエクシード剤又はキラップ剤を茎葉散布する。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ごま葉枯病	—	平年並	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第2世代)	—	平年並	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月5半旬まで飛来は確認されていない。 また、7月5半旬の巡回調査でも発生は確認されなかった。
ヒメトビウンカ	—	平年並	平年並	斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月5半旬の巡回調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ (第3世代)	—	やや少ない	やや少ない	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ	—	やや少ない	やや少ない	7月23日現在、飛来は確認されていない。 今後の予察情報に注意する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 紫斑病 (子実)	やや早い (—)	多い (—)

(1) 予報の根拠

ア 7月19日発表の作況ニュース第6号によると、大豆の生育は早まっており、開花期が早まると予想される(—/)。

イ 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている(/+)。

ウ 前年収穫期の被害粒率から、越冬伝染源量は多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 開花期20～30日後にジマンダイセン水和剤(RACコード:M3)、ペンコゼブ水和剤(同:M3)、トライフロアブル(同:U16)、ニマイバー水和剤(同:10・1)、プランダム乳剤25(同:3)、Zボルドー(同:M1)、Zボルドー粉剤DL(同:M1)のいずれかを散布する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目散布の約10日後に追加防除を行う。

イ 無人航空機で防除する場合は、ニマイバー水和剤かプランダム乳剤25を各1回使用し、2回散布を基本とする。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

エ ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する(収穫45日前まで)。

オ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ウコンノメイガ	－	少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査（16地点）における叩き出し成虫数は0.1頭（平年0.8頭）で少ない、茎当たり卵塊数は0個（平年0.03個）でやや少ない、葉巻発生株率は0.8%（平年8.2%）でやや低い、同発生地点率は18.8%（平年52.4%）で低かった（－）。

イ 予察灯（6地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は4頭（平年11.0頭）でやや少なかった（－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので、よくほ場を観察する。

イ 7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上ある場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤などで防除する。

ウ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤又はプレバソンフロアブル5を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発生時期（発生盛期）	発 生 量
3 アブラムシ類 （ジャガイモヒゲナガアブラムシ） （ダイズアブラムシ）	やや早い（－） やや早い（－） やや早い（－）	やや少ない（前年並） 少ない（前年よりやや少ない） やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ジャガイモヒゲナガアブラムシ（－/－）、ダイズアブラムシ（－/+））。

イ 秋田市予察ほにおける7月5半旬の発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0%（平年2.1%）でやや低い（－）、ダイズアブラムシが0%（平年2.9%）で平年並だった（±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 吸実性カメムシ類 （ホソヘリカメムシ）	早い（前年より早い）	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/+）。

イ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおける成虫初確認時期は、6月6半旬（平年7月2半旬）で早く、7月1～5半旬の総誘殺数は14頭（平年10.3頭）で平年並だった（±）。

ウ 予察灯（6地点）における7月1～4半旬の総誘殺数は0頭（平年3.0頭）でやや少なかった（－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤又はパーマチオン水和剤でマメシンクイガとの同時防除に努める。

イ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンエアー、トレボンスカイMCのいずれ

れかを2回散布する。

ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 フタスジヒメハムシ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量は多いと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシンクイガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 マメシンクイガ	平年並（前年並）	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい（±/ ）。

イ 前年収穫期の被害粒率から越冬量は多いと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は、8月下旬～9月上旬に1回散布する。

② トレボン剤、プレバソソフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。ただし、前年多発しているほ場では、2回散布する。

③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソソフロアブル5のいずれかを9月上旬に2回散布する。

イ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ダイズサヤタマバエ	－	やや多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬のえだまめ巡回調査における被害莢率は0.1%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤などを散布する。

イ 無人航空機で散布する場合は、スタークル液剤10／スタークルメイト液剤10を開花日10日後頃に散布する。

ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ７月中旬のえだまめ巡回調査における発生茎率は0.7%（平成2.4%）でやや低く（ /－）、食害茎率は37.3%（平成28.4%）で平成並だった（ /±）。
- ウ 予察灯（6地点）における7月1～4半旬のツメクサガの総誘殺数は7頭（平成1.1頭）で多かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。
- イ ハスモンヨトウの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にカスケード乳剤、グレースシア乳剤などを散布する。無人航空機で散布する場合は、トレボンエアー、トレボンスカイMC、プレバソンフロアブル5のいずれかを使用する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	平成並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平成並か多いと予報されている（ /＋）。
- イ 7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.2%（平成5.8%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 適正な肥培管理を行う。
- イ 両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。なお、収穫時期が近い場合は、使用時期や総使用回数に注意する。
- また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は2週間以上確保する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ 7月4半旬の巡回調査における食害株率は37.7%（平成22.3%）で高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレースシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネ

ビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４半旬の巡回調査における食害株率は7.1％（平年10.8％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターSE（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されている場合は、防除を徹底する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

４ その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
シロイチモジヨトウ	－	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

D ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒斑病・葉枯病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４半旬の巡回調査における発病株率は1.0％（平年1.3％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月４半旬の巡回調査における食害株率は15.7％（平年15.4％）で平年並だった（ /±）。

- (2) 防除上注意すべき事項
ア ねぎ（夏どり）に準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ネギハモグリバエ	—	平年並（前年並）

- (1) 予報の根拠
ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
イ 7月4半旬の巡回調査における食害株率は1.1%（平年7.8%）でやや低かった（ /-）。
(2) 防除上注意すべき事項
ア ねぎ（夏どり）に準じる。

4 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
シロイチモジヨトウ	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

- (1) 予報の根拠
ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
イ 7月後半の巡回調査における発病株率は15.4%（平年16.3%）で平年並だった（ /±）。
(2) 防除上注意すべき事項
ア 敷きわらなどを行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。
イ 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。
ウ 定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
エ 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などの治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
オ RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 うどんこ病	—	やや少ない（前年並）

- (1) 予報の根拠
ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0.7%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシシナール水和剤（同：19）、ポリベリン水和剤（同：19・M7）などの薬剤を葉の表裏にかかるように散布する。アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 褐斑病	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は0%（平年0.3%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ 発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 斑点細菌病	－	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 7月後半の巡回調査における発病株率は7.0%（平年6.3%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 過剰施肥をしない。また、過繁茂を避け、通風を改善する。

イ 発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 炭疽病	－	多い（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月後半の巡回調査における発病株率は4.1％（平年1.8％）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ ジマンダイセン水和剤や銅水和剤による予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（ＲＡＣコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。
- ウ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	－	やや少ない（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月後半の巡回調査における発生株率は4.6％（平年7.7％）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。
- ウ 定期的に、コルト顆粒水和剤（ＲＡＣコード：9B）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ワタヘリクロノメイガ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月後半の巡回調査における発生株率は2.0％（平年0.7％）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 初期被害を早期に見し、若齢幼虫期に防除する。
- イ アファーム乳剤（ＲＡＣコード：6）、グレーシア乳剤（同：30）などを散布する。ただし、抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病株率は3.2%（平年5.7%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が２週間と長いので、発病前からゲッター水和剤（ＲＡＣコード：１・１０）、ダコニール１０００（同：Ｍ５）、ベルコート水和剤（同：Ｍ７）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、ＲＡＣコードが１、３、７、１０、１１の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病株率は０%（平年０%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が２週間と長いので、発病前からダコニール１０００（ＲＡＣコード：Ｍ５）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：１０・１）、トリフミン水和剤（同：３）、ファンベル顆粒水和剤（同：１１・Ｍ７）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、ＲＡＣコードが１、３、７、１０、１１の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病株率は0.4%（平年2.7%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（ＲＡＣコード：１・１０）、ロブラル水和剤（同：２）、ファンベル顆粒水和剤（同：１１・Ｍ７）、ベルコート水和剤（同：Ｍ７）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。特にＲＡＣコードが１、２の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 うどんこ病	－	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年0％）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- イ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらパンチョTF顆粒水和剤（同：3・U6）、ラミック顆粒水和剤（同：M7・50）を散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、50の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	－	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 北秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬の青色粘着板への誘殺数は846頭（平年533.9頭）でやや多かった（ /+）。
- ウ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.25％（平年0％）だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、マッチ乳剤（同：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
疫病	－	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 （ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）	－	平年並	平年並	

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 7月中旬の巡回調査における発生茎率は0.7％（平年2.4％）でやや低く（ /－）、食害茎率

は37.3%（平年28.4%）で平年並だった（ /±）。

ウ 予察灯（6地点）における7月1～4半旬のツメクサガの総誘殺数は7頭（平年1.1頭）で多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア ツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSCのいずれかを散布する。無人航空機で防除する場合は、トレボンエアー、プロフレアSCを散布する。

イ ハスモンヨトウの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にカスケード乳剤、グレースシア乳剤、プロバゾンフロアブル5などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ダイズサヤタマバエ	－	やや多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における被害率率は0.1%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 中晩生品種では開花日（ほ場全体の50%程度が開花した日）10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃及び14日後頃に2回、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤を散布する。無人航空機で防除する場合は、スタークル液剤10／スタークルメイト液剤10を開花日7日後頃及び14日後頃に2回散布する。

イ 中晩生品種又は晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤5を選択する場合は、開花日頃～開花日7日後頃に2回使用する。

ウ 乳剤、顆粒水溶剤の散布液量は200～300L/10aとし、莢によく付着するように散布する。また、粒剤を使用する場合は、ほ場全体に均一に散布する。

H 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	－	多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ 防除適期決定ほ（3地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は268頭（平年2.2頭）で多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月19日発表の注意報第2号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ハスモンヨトウ	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ 秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数は553頭（平年1.5頭）で多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月17日発表の防除対策情報第8号を参照して防除する。

I りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	—	多い（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は4.6%（平年2.0%）、同地点率は90.0%（平年73.9%）でいずれも高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月30日発表の防除対策情報第11号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	—	平年並（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢率は2.9%（平年2.5%）で平年並、同地点率は5.0%（平年15.5%）で低かった（ /-）。

ウ 7月中旬の巡回調査における発病果率は0.8%（平年0.2%）で高く、同地点率は5.0%（平年7.4%）で平年並だった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病葉、発病果は見つけ次第摘み取り、焼却する。

イ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、耐性菌の出現を回避するため必ずRACコードの異なる保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）に加用し、2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）、同地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。

ウ 薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ Q o I 剤（RACコード：11）を使用する場合は、耐性菌の出現を回避するため必ずRACコードの異なる保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）に加用し、2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 輪紋病	－	やや多い（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。なお、本剤の使用回数は3回以内である。

イ 薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ Q o I 剤（RACコード：11）を使用する場合は、耐性菌の出現を回避するため必ずRACコードの異なる保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）に加用し、2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 褐斑病	－	多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における発病新梢率は1.8%（平年0.0%）、同地点率は45.0%（平年1.4%）でいずれも高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 7月30日発表の防除対策情報第11号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.1%）で平年並、同地点率は10.0%（平年2.3%）で高かった（ /+）。

ウ 防除適期決定ほ（6地点）における7月1～4半旬のフェロモントラップへの平均誘殺数は32.7頭（平年32.4頭）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、6日以上おく。

イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.3頭（平年0.6頭）、同地点率は50.0%（平年55.1%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は1薬剤1回、かつ作用点が同一の殺ダニ剤の使用回数は1回として、効力低下を防止する。

ウ エコマイト顆粒水和剤（RACコード：23）とダニゲッターフロアブル（同：23）は、作用点が同一のため注意する。

エ ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

オ オマイト水和剤は葉害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。

カ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。

- ① コロマイト乳剤はストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤又はベフラン液剤25との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	やや多い（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（6地点）における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は15.0頭（平年16.9頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ 園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水

溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 キンモンホソガ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ７月中旬の巡回調査における食害葉率は0.3％（平年0.2％）で平年並、同地点率は50.0％（平年22.6％）で高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ 発生が多い園地において、県北部では８月２～３半旬頃、県中央部・県南部では８月１～２半旬頃にネオニコチノイド系剤（ＲＡＣコード：４Ａ）、ピレスロイド系剤（同：３Ａ）などを散布する。

10 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類 （リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキ、リンゴモンハマキ）	－	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /＋）。

イ ７月中旬の巡回調査における発病果率は0.1％（平年0.2％）でやや低く、同地点率は20.0％（平年25.1％）で平年並だった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 病斑部を切除し、園外へ搬出し処分する。

イ オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80を８月上旬まで10日ごとに散布する。降雨が続くと予想される場合や発病が認められる園地では散布間隔を７日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.4％（平年4.0％）、発病果率は０％（平年0.1％）でいずれもやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 南水、二十世紀、新水、八雲などの品種で発生しやすい。
- イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、園外へ搬出し処分する。
- ウ オキシラン水和剤を８月上旬まで10日ごとに散布する。降雨が続くと予想される場合や発病が認められる園地では散布間隔を７日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月上中旬の降水量から、感染量は多かったと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア いぼ病斑の多い枝は伝染源になるので切除し、園外へ搬出し焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。
- イ キャブレート水和剤、オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80などを８月上旬まで10日ごとに散布する。降雨が続くと予想される場合や発病が認められる園地では散布間隔を７日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における被害果率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。
- ウ 防除適期決定ほ（４地点）における７月１～４半旬のフェロモントラップへのモモシンクイガの平均誘殺数は16.8頭（平年22.4頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤（ＲＡＣコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。
- ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 7月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.03頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 徒長枝の切除、焼却を行い、夏期の発生源を少なくする。

イ 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は1薬剤1回、かつ作用点が同一の剤の使用回数は1回として効力低下を防止する。

エ 殺ダニ剤を使用する際は、次の点に注意する。

① コロマイト水和剤は高温・乾燥時の散布や、樹勢の弱っている樹への散布で、葉に薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。

② ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（4地点）における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は3.3頭（平年24.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ 園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド系剤（RACコード：4A）、ピレスロイド系剤（同：3A）のいずれかを散布する。

7 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキ) (第2世代)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

K どう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は0.2%（平年0%）だった（ /+）。
- ウ ７月中旬の巡回調査における発病果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 胞子が雨滴のはね上がりで伝搬するので、敷きわらを厚く敷いておく効果的である。
- イ ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドーなど）を散布する。
- ウ ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 灰色かび病	－	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における発病葉率は0.2%（平年0.2%）で平年並だった（ /±）。
- ウ ７月中旬の巡回調査における発病果房率は0%（平年0.3%）でやや少なかった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉は焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 晩腐病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ５月下旬の巡回調査における発病花穂率は平年並、７月上中旬の降水量は多かったことから、感染量はやや多かったと推定される（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 （チャノキイロアザミウマ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ７月中旬の巡回調査における被害果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

ウ 防除適期決定ほ（２地点）における７月１～３半旬の黄色粘着板への総誘殺数は27頭（平年13.0頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発生時はアグロスリン水和剤（RACコード：3A）、エクシレルSE（同：28）、ディアナWDG（同：5）、モスピラン顆粒水溶剤（同：4A）などを散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

IV. 気象予報

令和6年7月25日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月27日～8月26日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・ 期間のはじめは前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

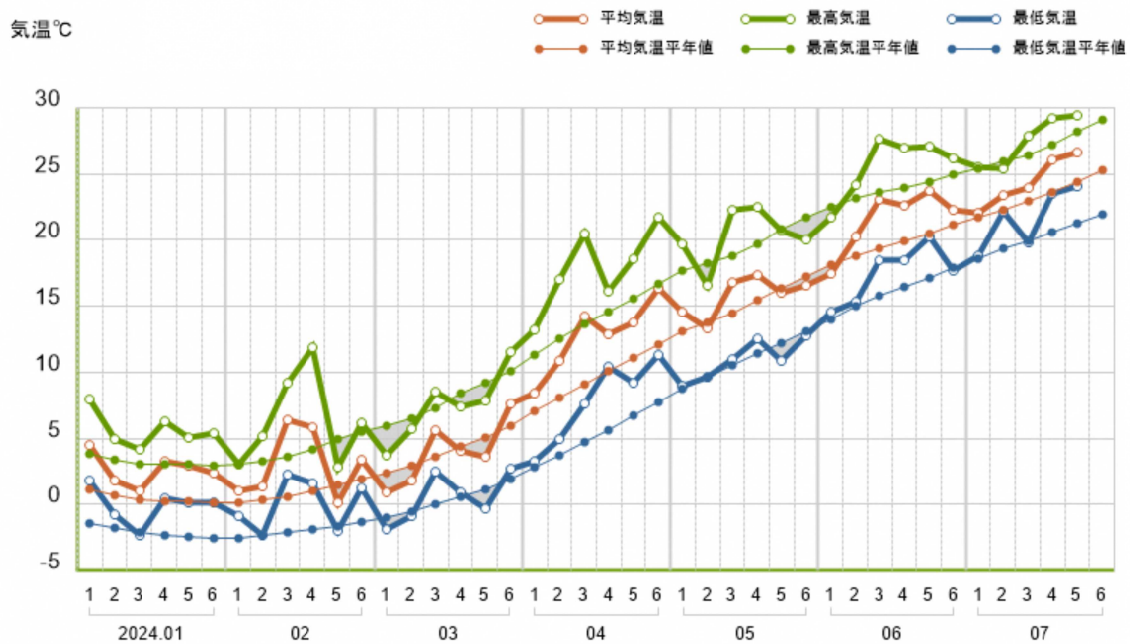
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	30%	40%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

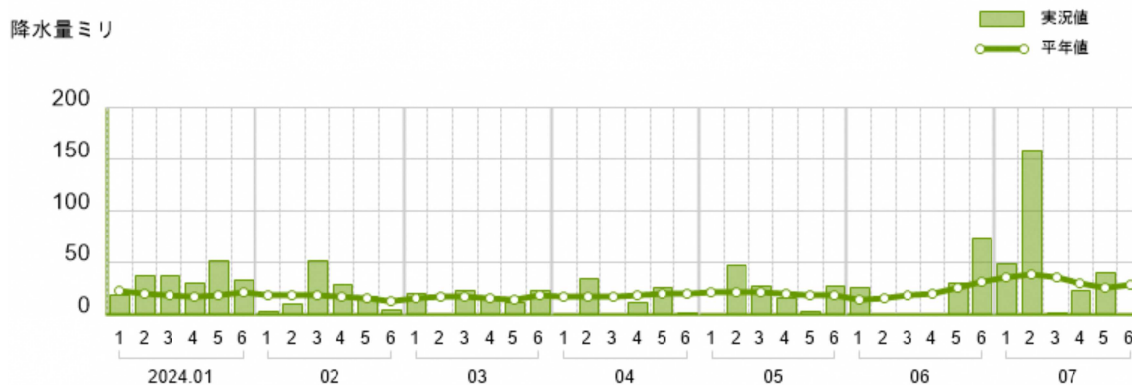
	低い	平年並	高い
7/27～8/2（1週目）	10%	50%	40%
8/3～8/9（2週目）	10%	30%	60%
8/10～8/23（3～4週目）	10%	30%	60%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

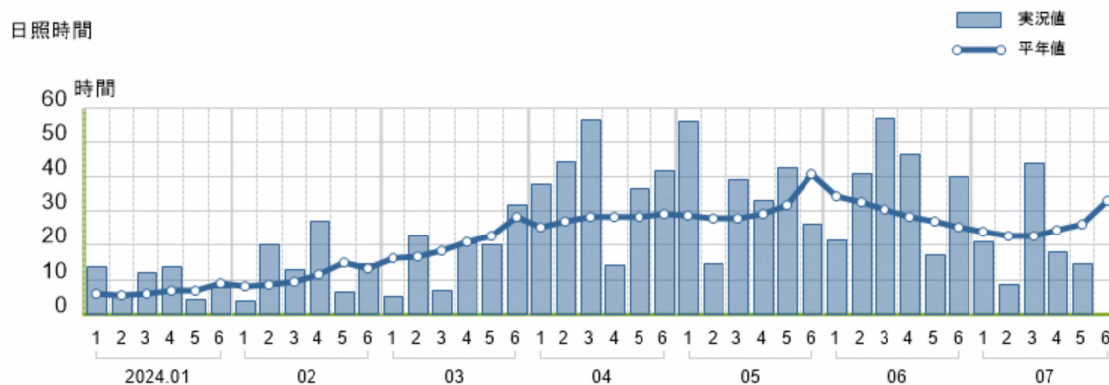
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

